

# 日露戦争が世界史に与えた影響



ひらま よういち  
平間洋一  
(元防衛大学教授)

「坂の上の雲」の時代は文明国が非文明国を併合し、キリスト教に改宗させることが神の摂理であり、それが「白人の重荷(責務)」などと考える弱肉強食の社会ダウニズム論が支配する帝国主義の時代であった。この弱肉強食の時代に日本はかろうじて独立を護り、日清日露戦争に勝ち有色人種の異質な帝国として世界に登場した。日露戦争に際し日本が最も留意したのが、野蛮な東洋の未開国と思われぬことであり、人種宗教戦争と見られないことであった。「文明国」との評価はある程度は成功したが、黄色人種の新キリスト教国が白色人種のキリスト教国に勝利したため、アジアや中東などに民族独立、人種平等の夢を与え、欧米帝国主義諸国の植民地に民族国家独立への衝撃を与え人種宗教戦争となってしまう。それでは最初にその衝撃の概要を見てみよう。

## 日露戦争がアジア諸民族に与えた衝撃

近代中国建国の父・孫文は「日本の勝利が有色人種や大国の庄政に苦しむ諸民族に民族独立の覚醒を与え、ナショナリズムを急速に高めた」と書いているが、中国では日本への留学熱が高まり、一九〇五年には留学生は一万二千名に達した。そして、孫文は日本への留学を通じて啓蒙された青年たちを率い

て、辛亥革命を実現し中国に最初に近代的国家を誕生させた。

ベトナムのファン・ボイ・チャウは、「日露大戦の報 長夜の夢を破る」「日露戦役は実に私たちの頭脳に一世界を開かした」「米国の虎やヨーロッパの鯨の横暴に対して、黄色人種として初めて歯止めをかけた。なぜ日本がそれをなし得たか。

答えは東京にある。中国、朝鮮、インドからの留学生で東京は溢れている、日本に学べ」と、若者を日本に留学させる「ドンズー(東遊運動)」を初め、二百名余の若者を日本に送った。また、福沢諭吉の『学問のすすめ』に感動したチャウは、ハノイに慶応義塾に倣って「トンキン義塾」を創設し独立自尊の精神を教えた。フィリピンでは日本海海戦の勝利が伝わり、大学生のちに最高裁判所判事になったハリレノは日本領事館に祝電を打ち、のちに国会議員となったコーポラウは「アジアの時代が来た。アジア人がヨーロッパに対して立ち上がる時が来た」と感じたと同想しているが、日本の勝利は米國と独立戦争を戦っているアギナルド軍の士気を高めた。

インドのネール首相は「日本の勝利はアジアにとって偉大な救いであった」と書いたが、日本の勝利はインド人に自尊心と自信を与え、一九〇五年には国産品愛護のスワデージ、英国製品品のボイコット、自治要求のスワラージと国民教育促進の四綱

領を採択させた。

また、ビルマ独立後に最初の首相となったバ・モーも、日本の勝利は「すべての虐げられた民族に新しい夢を与える歴史的な夜明けであった。日本の勝利はわれわれに新しい希望と誇りを与えてくれた」と書いているが、ビルマでは青年僧ウー・オッタマが仏教徒青年同盟を組織し反英独立運動を開始した。

### 日露戦争のイスラム世界に与えた衝撃

エジプトではカーミルが「ほとんど信じ難いまでの勝利を収め、生きとしいけるものに衝撃を与えたこの民族とは一体何者なのか」を説明すると『昇る太陽』を書いた。また国民的詩人イブラーヒームは「われは日本の乙女、銃もて戦う能わずも、身を挺して傷病兵に尽くすはわが務め」との「日本の乙女」という詩を書いたが、この詩はエジプトだけでなく、多くのアラブ人に愛唱され男尊女卑のアラブ社会の女性を覚醒させ、独立運動への参加の道を広げただけでなく女性の地位を高めた。

イラン人シーラーズイーは「東方からまた何という太陽が昇ってくるのだろうか。眠っていた人間は誰もがその場から跳ね起きる。文明の夜明けが日本から拡がったとき、この昇る太陽で全世界が明るく照らし出された」との『ミカド・ナーメ（天皇の書）」を書き、日本がアジアに新しい光を投げかけ、長い無知の暗闇を駆逐したと明治天皇を讃えた。そしてイスラム社会では日本をリーダーとし天皇をカリフ（盟主）に仰ぎ、イスラム教徒の求心力を回復し、西欧勢力に対抗しようとのパン・イスラム運動が高まりを見せていった。

トルコでは女流作家のハリデ・エディブ・アドゥヴァルが、次男にハサン・ヒクメトツラー・トーゴーと名づけたが、イス

タンブルではトーゴー通りやノギ靴店など日本軍指揮官の名前が付けられた。また、日露戦争に親戦武官で従軍したバシヤ大佐は、『日露戦争の物質的・精神的教訓と日本勝利の原因』を刊行し、「旅順攻略軍の勇敢さ、兵士の犠牲的精神を賞賛し、トルコの未来も日本を見習って一致団結し、近代化を進めるならば決して悲観すべきものではない。国家の命運は国民にあり」と訴えた。そして、この日本の勝利がトルコの近代化を推進する青年党運動となり、アタチュルクのトルコ革命へと連なっていた。

### 欧米諸国への影響

日露戦争の勝利は単に有色人種間に止まらず、ロシアの圧制に苦しむフィンランドやポーランドなどへも飛び火し、民族国家独立闘争を激化させた。ポーランドの作家プルスは『クーリエ・コディゼニー』に「日本と日本人」を連載し、日本に見習えと次のように説いた。

日本人の「最も優れているのは愛国心である。日本人の愛国心は外国人への憎しみや軽蔑に根ざしたものでなく、己に属するすべてのものに対する愛情に基づいている。軍のために何人かの者がその命を犠牲にして任務を遂行する必要が生じた場合、何人かではなく何千人もの者が自らその任務に志願するだろう。……これが、つい二年前にはヨーロッパ人に『猿』と呼ばれていたにもかかわらず、今は敵国からも尊敬を集めている国の姿である。尊敬されたいと思うなら日本人を手本として努力しなければならぬ」。

一方、レーニンは「旅順の降伏はツァーリズムの降伏の序幕である。専制は弱められた。革命の始まりである」と書いたが、ロシアでは旅順陥落の直後に首都のサンクトペテルブルクで「血の日曜日」事件が起こり、この日を境に革命のマグマが燃え続け、十二年後には世界で始めての共産主義国家を誕生させた。

### 日露戦争後の世界情勢

日露戦争が終わると世界情勢は激変した。日露開戦以前の日英と露独仏の対立図式から、ドイツに対する敵対を軸として、ロシアが世界戦略の一環として日英に接近、ドイツの大国化に脅威を感じたフランスも日英ブロックへの加入が必要な国際情勢に変化した。一方、ポーツマス講和会議を斡旋し国際社会に大国として登場した米国では、人種問題が再燃し反日論が高まり、日露戦争の終わった翌一九〇六年にはサンフランシスコ市で日本人と朝鮮人学童隔離令が発せられ、一九一三年にはカリフォルニア州議会が日本人土地所有禁止法案を可決した。このように日露戦争後にはホーマー・リーが『無知の勇氣』（邦訳『日米必戦論』）で指摘した「日米間には対抗心を和らげる戦争の発生を防ぐ宗教的、論理的および社会的状態を均一にする人種的關係も、経済的相互依存關係もない」日米關係が太平洋を挟んで生じたのである。

一方、日本はフィリピンの独立派を支援していることに脅威を感じている米国と一九〇五年七月に桂タフト覚書、一九〇八年十一月に高平ルフト協定を結び、日本がフィリピンの現状維持を認め、米国が大韓帝国の現状維持を認める交換公文に署名した。英国とは一九〇五年八月の第二次日英同盟改定で、インド独立派への支援中止と引き替えに満州や大韓帝国の特殊利益

を認めさせた。

一九〇七年六月にはフランスのベトナムの支配を容認し、ベトナム留学生の反仏運動を取り締まることで、大韓帝国や満州などで獲得した権益を認めさせ三億フランの借款を得た。さらに同年七月には日本がロシアに外モンゴル、ロシアが日本に満州と大韓帝国の権益を認める日露協商を締結した。このように、日本は英米仏露などから大韓帝国の保護権を確立し一九一〇年には大韓帝国を併合した。この日露戦争後の日本の動きはアジア民族に大きな衝撃と落胆を与えた。ファン・ボイ・チャウは日本が白色人種に迎合し、黄色人種を抑圧していると激しく非難する書面を外相小村寿太郎に送り、あれほど賞賛した日露戦争を、「区々たる征露の一役のごときは、歴史の上でどれほどの価値があるか」とさえ批判した。日露戦争の日本の勝利に歓喜したチャウは、それから四年後には日露戦争の意義を否定し、日本を欧米列強と同類のアジアの敵と見なす立場に変わったのであった。

とはいえ、日本は日露戦争後にアジアや中東の多くの民族主義者が独立を夢見て来日すると、志士と呼ばれるアジア主義者たちが非公式に、時には政府と連携しながら暖かく受け入れ庇護し支援し続けていた。西欧の史書はフランス革命が民族国家を成立させたとしているが、民族国家独立への「坂の上の雲」の夢をアジアやアラブ、アフリカの国々に与えたのが日露戦争であった。

日露戦争から百年の日本の近代史は苦難に満ちた歴史ではあったが、国連の事務総長は有色人種の指定席となり、米国では黒人のオバマ大統領が誕生した。日本人はもうすこし歴史を学び、自国の歴史に誇りを持って良いのではないか。